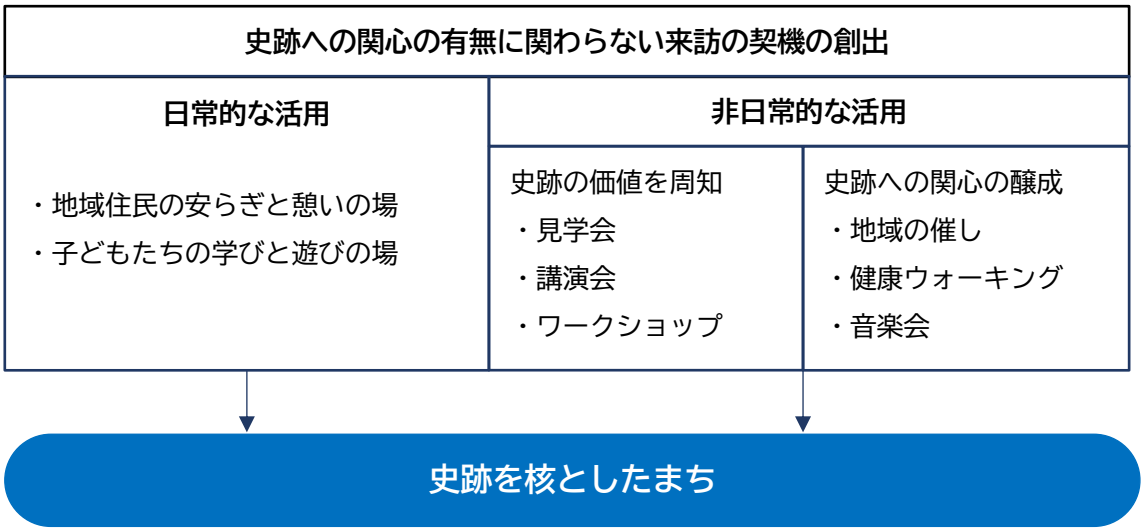
第７章　活用

第１節　方向性

活用の方向性については、整備基本計画（第１期）に示す方向性を踏まえつつ、次のとおり方向性を定める。

史跡の価値をより適確に把握するために、必要な調査研究を継続する。市民をはじめ多くの来訪者に史跡の価値を広く伝えるため、デジタル技術など、様々な手法による情報発信を行う。さらに、世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の構成資産として広く知られている利点を活かし、周辺の歴史文化資源と共に積極的な活用を図る。活用にあたっては、市民との協働や関係機関と連携を図り、実施する。



整備基本計画における活用の方向性

小学生授業オリエンテーション（旗塚古墳）

百舌鳥古墳群魅力発掘講演会

寺山南山古墳発掘調査現地説明会

第 2 節　方法

（1）調査研究における活用

史跡の価値を的確に把握するため、発掘調査や歴史資料調査、自然調査など様々な調査を進める。また、百舌鳥古墳群だけでなく周辺遺跡の調査も重要であり、各古墳の周辺地域の歴史や古墳が守られてきた歴史を解明する調査にも取り組む。これらの調査は大学などの研究機関との連携により推進することも重要である。発掘調査を実施した際には、現地説明会を実施し、百舌鳥古墳群に対する理解や関心を高める機会とする。

調査成果は調査報告書やパンフレットなどの紙媒体のほか、博物館や百舌鳥古墳群ビジターセンターにおける展示、ホームページをはじめとするＩＣＴ（情報通信技術）を活用した多様な媒体により積極的に公開していく。他地域の博物館などへの資料貸出や連携事業などにより、広域的に百舌鳥古墳群の価値が伝わる取組を実施する。

（2）学校教育における活用

史跡を次世代へ継承していくため、子どもたちが地域の歴史・文化を学び、郷土を愛する心を育むことが重要である。学校教育の需要を把握しながら学びの場で活用しやすい資料を提供する。使用教材・副読本などは、調査研究の成果に照らしながら適宜更新する。また、学校に出向いた出前講座などにより「子ども堺学」の充実を図り、史跡に対する理解を深める取組を推進する。

学校教育との連携だけでなく、自然観察会や写生会など低学年の子どもでも参加できるイベントを企画し、史跡が身近な遊びと学びの場となるよう取り組む。

（3）生涯学習における活用

百舌鳥古墳群を活用した学習機会が幅広い世代に拡充されるよう、考古学的な解説を主とする講演会の開催や市民講座への協力だけでなく、ウォークラリーや自然観察会など異なる視点から古墳にアプローチするような取組を進める。

また、堺市博物館・百舌鳥古墳群ビジターセンターでは、体験学習プログラムを充実させ、必要に応じた常設展示の更新などにより利用の促進を図る。また、学芸員による解説や映像などの積極的な活用により百舌鳥古墳群の価値を発信する。

（4）地域・観光振興における活用

ア．地域振興における活用

百舌鳥古墳群は、地域の文化財や自然・文化・産業などが一体となった本市特有の地域資源の一つであるため、百舌鳥古墳群とその他の地域資源を結び付けることで様々なストーリーを展開し、地域の活性化を図る。

史跡は地域住民だけでなく多くの来訪者の交流拠点であるため、史跡を活用したイベントを開催するほか、史跡周辺で実施される百舌鳥古墳群を活かしたイベントの開催や情報発信など史跡を核とした地域活性化の取組を支援する。

イ．観光における活用

百舌鳥古墳群の多くの古墳が所在する大仙公園は、本市の「堺観光戦略」において古代の堺を体感できるエリアとして重点エリアの一つに位置付けられ、来訪者の周遊促進の取組が進められている。これらの取組を推進するため、観光部局や堺観光コンベンション協会などと連携しながら、様々な観光イベントに参加し、史跡の価値や特色と共に史跡へのアクセスなどの来訪者にとって有益な情報を発信する。

百舌鳥古墳群の案内を支える観光ボランティアガイドには、調査成果など適宜情報を提供し、ガイド活動の向上を図る。また、ボランティアの学びの意欲に応え、生涯学習に資することをめざす。

世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の構成資産として、国内外に広く情報を発信し、広域観光のネットワークに有益な資源として活用を図る。また、世界遺産であることも踏まえ、多言語解説にも積極的に取り組む。

史跡が広範囲に点在するため、周遊にはレンタサイクルを活用する。レンタサイクルで周辺の歴史文化資源への周遊も促し、史跡を核とした堺の魅力を伝え、再来訪意欲を高める。なお、レンタサイクル以外の有効な移動補助手段については今後も検討を継続する。

（5）ガイダンス機能における活用

堺市博物館は百舌鳥古墳群の本格的な学習の場、百舌鳥古墳群ビジターセンターは入門的な学習の場として、両施設をガイダンスのための施設と共に本市の観光ネットワークの中核として位置づけ、施設の特質に応じた役割により効果的な情報発信に努める。

史跡に対する理解をより深めることをめざし、必要に応じて展示内容などを更新しながら、両施設の機能の強化と連携による相互利用促進に取り組む。